

機関番号：14503

研究種目：基盤研究B一般

研究期間：2008年度～2010年度

課題番号：20300209

研究課題名（和文） 嘉納治五郎の体育思想の海外における評価と受容

研究課題名（英文） International Evaluation and Acceptance of Jigoro Kano's Physical Education Ideals

研究代表者

永木 耕介 (NAGAKI KOSUKE)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：10217979

研究成果の概要（和文）：嘉納治五郎による体育思想は、柔道普及およびオリンピック委員の活動を通して欧米各地で受容され、高い評価を受けていたことが明らかになった。その理由は、次の3点に集約できる。(1)嘉納自身の力（教養／語学力、人柄、教育力、行動力、統率力、継続力等）、(2)国際オリンピック委員としての地位と名声、(3)海外での各層（柔道／スポーツの実践者～知識人／政治家）における幅広い人脈。

研究成果の概要（英文）：Jigoro Kano's ideals for physical education have been conveyed and widely appraised in the West through judo and the Olympic movement. There are three reasons for this positive evaluation: 1. Kano's individual attributes (education / linguistic ability / character / activeness / leadership / continuation); 2. Position and influence in the International Olympic Committee; 3. Comprehensive international network (judo / sportspeople / academics / politicians.)

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2009年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	7,900,000	2,370,000	10,270,000

研究分野：スポーツ文化人類学

科研費の分科・細目：スポーツ科学

キーワード：嘉納治五郎、体育思想、柔道、海外調査

## 1. 研究開始当初の背景

嘉納治五郎（1860-1938年；以下、嘉納と略す）は、東京高等師範学校長等の教育職に就きながら、講道館（柔道）等の私塾を営み、また明治42（1909）年からはアジア初の国際オリンピック（IOC）委員となって大日本体育協会を設立するなど、国内外の教育・体育に多大なる貢献を為した人物である。彼の活動や体育思想に関する研究はこれまでもなされてきたが、日本国内の立場から見たものであり、海外ではどのように受け止めら

れていたのかについては詳しい研究がない。なお、ここでいう「体育思想」とは、柔道やスポーツといった身体活動による教育思想のことを意味している。そのような研究状況にあって、第58回日本体育学会（2007.9.6；神戸大学）において「嘉納治五郎と日本の体育・スポーツ」と題する本部企画シンポジウムが開催され、嘉納研究に詳しい研究者が集った。このシンポジウムを大きなきっかけとして本研究を推進することとなった次第である。

## 2. 研究の目的

前述の研究背景により、本研究の目的は、嘉納の体育思想の、特に海外における評価と受容について明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

研究方法は、史（資）料の収集・発掘、および情報提供者に対する聞き取り調査によった。なお、嘉納自身の関心が高く、活動が盛んであった欧米および中国を調査対象とした。

## 4. 研究成果

2008年度は、オリンピック博物館（スイス・ローザンヌ）において、オリンピックと嘉納の関係について研究代表者、分担者、海外協力者らが共に調査を行った。1909年に嘉納が国際オリンピック委員に就いた経緯をはじめ、委員としての活動状況および、当時のオリンピックの主導者であったP.クーベルタンとの接点についても関係資料を探った。特にクーベルタンと嘉納の関係について、書簡等をみる限りにおいては事務的な連絡が中心であり、スポーツの思想面などで意見交換した証拠は見出せなかった。この点については、和田（研究分担者）が次の論文により成果を発表した。和田浩一、「嘉納治五郎のピエール・ド・クーベルタン宛書簡（1）—嘉納のIOC委員就任から第一次世界大戦まで—」、講道館科学研究会紀要12号、2009、pp. 17-28.

次に、嘉納による講道館柔道の普及活動に対する評価と受容について、研究代表者・研究分担者・海外協力者らがヨーロッパにおける調査活動を行った。嘉納の普及活動はイギリスおよびドイツで盛んであり、特にヨーロッパ最古の武術クラブといわれるイギリス・ロンドンの武道会（Budokwai）では、その創設に関わった日本人の柔術家（小泉軍治、谷幸雄）らが嘉納の訪問・指導によって柔道家へと転向し、イギリスのみならずヨーロッパ中に“柔道”を知らしめる影響力をもった。

そこで2008年9月、現存する武道会を訪問して現会長等から過去の事情等に関する聞き取り調査を行い、また、Bath大学のM.Callan教授（当時）らの協力を得て当大学図書館に所蔵されている武道会議事録、書簡等の調査に当たった。調査により次の事柄が明らかとなった。小泉ら武道会の中心メンバーは、嘉納が1920年にはじめて訪問した時すでに、柔道は柔術をより科学的に進化させ、同時に教育的価値を追究するものであるという理念面を認識していた。彼らが嘉納／柔道を評価していた理由の一つには、嘉納が日本における武術総合団体であった大日本武徳会の柔術部門において各柔術流派の試合審判規程や形を整理・統合（それぞれ1899年と1906年）した人物であり、柔道がその基本モデルになっていたことによる。それらの情報は、柔術あるいは柔道に関わりのある複数の日本人あるいはイギリス人によって武道会へもたらされていたとみられる。ここで一つ指摘できるのは、海外に存した柔術家たちは、柔術と柔道を連続したものであると捉えており、その点が彼らを違和感無くスムーズに柔道へ参加／転向させたことである。さらに嘉納の側からいえば、欧米における柔術の流行に乗じながらそれを革新するものとして柔道を普及させていく必要があった。この点に関して、永木（研究代表者）が次の論文により研究成果を公表した。永木耕介、「嘉納治五郎が求めた『武術としての柔道』—柔術との連続性と海外普及—」、スポーツ人類学研究10・11合併号、査読有、2009、pp. 1-17.

また、武道会は柔術や剣術といった武術以外にも、茶道、華道、仏教等の講座を開き、格調高い日本文化のカルチャースクールたることを目指していた。このことから、1909年以降、国際オリンピック委員に就いていた

嘉納はその地位・名声からも適当な人物として選択された。例えば、1920年7月の嘉納の武道会への初訪問より9ヶ月ほど前に、世界中で知られていた『武士道 (The Sole of Japan)』の作者である新渡戸稲造が武道会に呼ばれて「日本の忠誠心」と題する講演を行っている(武道会議事録により判明)。なお、新渡戸は当時イギリス在住でその後、国際連盟事務局次長に就任している(なお、新渡戸と嘉納は同年代の知り合いであり、思想的にも似通った面がある)。

2009年度は、研究分担者(A.ベネット)と海外協力者であるA.Niehaus博士(Prof. of Universiteit Gent)の協力を得てドイツでの調査を実施した。特に、ケルン体育大学図書館において第11回オリンピック・ベルリン大会と嘉納の接点、および1930年代の格闘技雑誌(Kraft Sport誌)に掲載された嘉納/柔道の関連記事等を探った。ドイツでは1920年代までは国内でオリジナル化された柔術が流行していたが、1928年のベルリンにおける嘉納の柔道講演以降、柔道が知られはじめ、それ以降、柔道が普及していった。その普及に大きな役割を果たしたのが、先述のイギリス武道会との交流であった。例えば、1932年にフランクフルトで開催された国際的な柔道サマースクールでは、小泉、谷らが出向いて指導している。イギリスとの交流により、ドイツは柔道の競技力を向上させ、次第にイギリスをも負かすようになった。また、嘉納は1933年7月、オリンピック委員としての活動中にA.ヒトラー総統と面会し、ラジオ放送により柔道を紹介する等を行ったことから、ドイツ国内での柔道熱はますます高まっていった。そして、1936年に開催されるオリンピック・ベルリン大会で柔道を採用しようとする動きもドイツでは出ていた。嘉納は、1933年にドイツで「柔道世界連盟」

構想を発表しており、一見すれば、「柔道世界連盟→柔道のオリンピック採用」は自然な流れであったかのようにみられる。たが、我々の調査により、それは皮相な見方であることが判明した。一つには、第2次世界大戦へと向かう中でのイギリスとドイツの国家政治的な関係悪化が影響した。武道会の議事録等によれば、当会のイギリス人メンバーは、嘉納/柔道とドイツの接近について警戒を強め、1935年には、1933~34年に決定していた武道会が日本の講道館の支部(有段者会)に入るという約束を白紙撤回し、小泉を武道会役員からはずしている。また一つには、柔道による平和主義(自他共栄)を理想としていた嘉納自身が、ベルリン大会へ向けて加速化するオリンピックの国威発揚的手段化や政治的利用から距離を置き、柔道界がその渦に巻き込まれることを避けようとしていた面もあった。これらの点については、2009年9月にフランスの嘉納研究者である国立科学研究センター研究員(当時)のY. Cadot博士とも研究討議を行い、概ね意見の一致をみた。

ともあれ、嘉納は表立って各国間の対立を激化するようなことはせず、1936年のベルリン大会時には1940年に開催予定であった第12回オリンピック大会の東京招致に成功している。当大会は日中戦争等の影響により嘉納が没したわずか2ヶ月後の1938年7月に日本が返上するのであるが、嘉納の死については各国のオリンピック委員や柔道家が、新聞等のメディアを通して、偉大なる教育者に対する哀悼の意を表明している。

2010年度は研究代表者の永木が中心となり、アメリカ・ハワイ州を対象とした調査を行った。重要な情報提供者として、ハワイ柔道史に詳しい日系3世のA.Aoki氏、およびオアフ島で最古といわれる柔術道場・尚武館

の A.Migita 館長と面会して資料収集と聞き取りを行った。いずれも基本的に、嘉納の現地訪問により柔道普及が促進されたことが確認された。なお、当調査で得られた成果は、2011年9月に開かれる第62回日本体育学会・スポーツ人類学専門分科会において永木が発表する予定である。

以上のように、嘉納治五郎の体育思想は、柔道普及およびオリンピック委員の活動を通して欧米各地で受容され、高い評価を受けていたことが明らかになった。その理由として、(1)嘉納自身の力(教養/語学力、人柄、教育力、行動力、統率力、継続力等)、(2)国際オリンピック委員としての地位と名声、(3)海外での各層(柔道/スポーツの実践者~知識人/政治家)における幅広い人脈を挙げることができる。

なお、アジア方面として、嘉納は彼の私塾(宏文学院)へ1909年までに約7,000人におよぶ中国人留学生を受け容れており、その後各界で活躍した者は多い。研究分担者の真田久が中心となって彼ら留学生に対する嘉納からの影響や嘉納に対する彼らの評価について調査した。その成果の一部は真田が次のように発表した。「東京高等師範学校における中国留学生の体育・スポーツ(1909~1915年)」、東北アジア体育・スポーツ史学会第8回大会、2009年8月3日、大連理工大学(中国)。「嘉納治五郎と国際交流・留学生」、嘉納治五郎生誕150周年記念国際シンポジウム、筑波大学主催、東京国際フォーラム、2010年6月12日。また、2010年11月20~22日に日本(東京)で開催された第1回アジア・スポーツ人類学会において、真田および寒川恒夫(研究分担者)が中心となって中国から来日した研究者と情報交換を行った。ただし、調査対象者の範囲が広いと、今後は的を絞った研究を進めていくことが課題として残

されている。

以上で述べた成果の主な点について、永木(研究代表者)および真田、和田(以上、研究分担者)、A.Niehaus(海外協力者)が、筑波大学出版会より2011年6月に刊行される図書、『気概と行動の教育者・嘉納治五郎』に分担執筆した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

- ①真田久、嘉納治五郎による「造士会水術」の設立、講道館科学研究会紀要13号、2011、pp. 27-40
- ②和田浩一、オリンピズムという思想、現代スポーツ評論23、2010、pp. 62-71
- ③永木耕介、嘉納治五郎は何をみていたのか、現代スポーツ評論23、2010、pp. 101-108
- ④鈴木康史、近代日本におけるスポーツの思想とは何であったのか、現代スポーツ評論23、2010、pp. 49-60
- ⑤和田浩一、嘉納治五郎のピエール・ド・クーベルタン宛書簡(1) - 嘉納のIOC委員就任から第一次世界大戦まで -、講道館科学研究会紀要12号、2009、pp. 17-28
- ⑥真田久、東京高師校長嘉納治五郎と校友会運動部の発展、講道館科学研究会紀要12号、2009、pp. 1-15
- ⑦永木耕介、嘉納治五郎が求めた「武術としての柔道」 - 柔術との連続性と海外普及 -、スポーツ人類学研究10・11合併号、査読有、2009、pp. 1-17(次の学術リポジトリにて公開：<http://hdl.handle.net/10132/3500>)

[学会発表](計11件)

- ①アレック・ベネット、BAMIS 国際フォーラム(たくましい心と体を育てよう：武道による身心統合の可能性を探る)、コメンテーター、2011年2月28日、筑波大学
- ②寒川恒夫、嘉納の柔道にみる身心問題、BAMIS 国際フォーラム(たくましい心と体を育てよう：武道による身心統合の可能性を探る)、2011年2月28日、筑波大学
- ③永木耕介、嘉納による武道の国際化、

BAMIS 国際フォーラム (たくましい心と体を育てよう: 武道による身心統合の可能性を探る)、2011年2月28日、筑波大学

④ H. Sanada、Jigoro Kano legacy、International Conference by Association of Italian Sport Education, Sport and Education、2010、Vercelli

⑤ 真田久、嘉納治五郎と国際交流・留学生、嘉納治五郎生誕150周年記念国際シンポジウム、筑波大学主催、2010年6月12日、東京国際フォーラム

⑥ 永木耕介、ヨーロッパにおける柔道の伝播と普及—嘉納治五郎のイギリス・武道会への影響を中心に—、日本スポーツ人類学会第11回大会、2010年3月28日、名桜大学

⑦ 永木耕介、ヨーロッパにおける嘉納の柔道普及の足跡、日本体育学会茨城支部・筑波大学共催シンポジウム (嘉納治五郎の偉業—柔道の創始・普及と教育改革—)、2009年12月5日、筑波大学

⑧ 真田久、嘉納治五郎のIOC委員就任の受容に関する一考察、第60回日本体育学会・スポーツ人類学専門分科会、2009年8月28日、広島大学

⑨ 永木耕介、改訂学習指導要領で子どもたちに何を保証できるのか—武道で触れることのできる「我が国固有の伝統と文化」とは何か— (当発表の一部でイギリスに関する状況を述べた)、第60回日本体育学会・組織委員会企画シンポジウム、2009年8月26日、広島大学

⑩ 真田久、東京高等師範学校における中国留学生の体育・スポーツ (1909~1915年)、東北アジア体育・スポーツ史学会第8回大会、2009年8月3日、大連理工大学 (中国)

⑪ 永木耕介、日本における柔道観の継承と変容 (当発表の一部でイギリスに関する状況を述べた)、第59回日本体育学会・スポーツ人類学専門分科会 (キーノート・レクチャー)、2008年9月10日、早稲田大学

[図書] (計1件)

① 真田久、永木耕介、和田浩一他、気概と行動の教育者・嘉納治五郎、2011年6月刊行 (印刷中)、筑波大学出版会

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

永木 耕介 (NAGAKI KOSUKE)

兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号: 10217979

### (2) 研究分担者

真田 久 (SANADA HISASHI)

筑波大学・人間総合科学研究科・教授

研究者番号: 30154123

鈴木 康史 (SUZUKI KOSHI)

奈良女子大学・文学研究科・准教授

研究者番号: 40323282

和田 浩一 (WADA KOICHI)

神戸松蔭女子学院大学・文学部・准教授

研究者番号: 20309438

寒川 恒夫 (SOGAWA TUNEO)

早稲田大学・スポーツ科学学術院・教授

研究者番号: 70179373

アレック ベネット (ALEX BENNETT)

関西大学・国際部・准教授

研究者番号: 40353445